

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02674

研究課題名（和文）日本語名詞節の内部構造と、主節に対する機能に関する研究

研究課題名（英文）Internal structures of Japanese noun clauses and their functions for the main clause

研究代表者

橋本 修（Hashimoto, Osamu）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：30250997

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）： 外の関係における名詞修飾構造を含む名詞述語文において異なるタイプを構成する2種の名詞を語彙として包括的にリスト化し、名詞句の指示に関する新たな知見および、教育への応用可能性を示した。また、名詞修飾構造におけるテンスの働きについて、一件相対テンスでも絶対テンスでもないと思われるもののうち、内の関係の連体修飾節に現れるものと、外の関係の連体修飾節に現れるものではふるまいが大きく異なることを具体的なコーパスの例で明らかにした。

談話機能については、連体修飾構造が連用修飾構造・接続節構造と互換可能なケースと互換不可であるケースを分離し、作文教育への応用可能性を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代日本語名詞節の分布の広がりや頻度の高さを、英語・中国語・古代日本と比較しながら概観し、内部の下位類との関わりとの相関を調査することで、従来疑問の余地が少なかった日本語名詞節の分布のあり方を、言語学的に相対化して位置づけることに成功した。また、下位類の性質について従来より細密に分析し、主節との関係においてパラメータとしてはたらく名詞修飾節にも2種類の区別があり、それぞれが概ね主名詞の語彙リストとして包括的に示しうることを明らかにした。

これらの成果のいくつかは、狭義の言語学的な価値だけでなく、母語話者・非母語話者ともに作文支援に貢献するという意味も持つ。

研究成果の概要（英文）： We made a comprehensive list of two types of nouns that make up different types in noun predicate sentences, including noun modification structures in external relationships, and presented new findings on noun phrase instructions and their applicability to education. Also, regarding the function of tenses in the noun modification structure, among those that appear to be neither relative tenses nor absolute tenses, those that appear in the adnominal modification clause of the inner relationship and those that appear in the adnominal modification clause of the outer relationship behave. Clarified in a concrete corpus example that there is a big difference. Regarding the discourse function, the cases where the conjunctive modification structure is compatible with the conjunctive modification structure / connection clause structure and the cases where it is incompatible are separated, and the applicability to writing education is presented.

研究分野：言語学

キーワード：名詞修飾構造 連体修飾 複文 従属節 談話 作文教育

### 1. 研究開始当初の背景

研究開始時点において、日本語名詞節の研究は「内の関係/外の関係」、「制限節/非制限節」の区別等、中心的な興味が多く修飾節と主名詞(被修飾名詞)との統語的・意味的關係、特にその分類に集中していた。そのような状況の中で、研究代表者・研究分担者ほか萌芽的に開始していた、修飾節・被修飾名詞の關係が主節と義務的に関わる現象が見いだされつつあり、この点について深く掘り下げ、新たな知見を生み出すことが期待された。

### 2. 研究の目的

本研究の主要な目的は以下の通りである。

第一点は、連体修飾節と被修飾名詞からなる名詞修飾構造の性質が、全体として名詞句として完結するのではなく、主節との相関においてある意味義務的に変異することを確認し、その変異の実態を具体的に明らかにすることである。

第二点は、さまざまな構造を持った名詞節と、それに対しパラディグマティックな關係にある副詞節、接続節等との互換性や選好について、現代日本語と、英語・中国語・古典日本語等と比較することによって明らかにすることである。

第三点は第二点と関連して、名詞修飾構造をメンバーに含む日本語従属節がどのように選択・複合して適切な日本語の複文、あるいは談話を構成するのかという、談話構成に関わる機能を解明し、国語教育・日本語教育への基礎的な情報を得ることである。

### 3. 研究の方法

研究手法は、データの収集と理論的検討、理論的仮説のシミュレーションによる検証を用いる。データとしては主として母語話者の内省データ、コーパスデータを利用し、一部のコーパスデータについては本研究自身で加工を行う。本研究は内容的に、いわゆる狭義文法論的側面と語用論的側面を持つが、狭義文法論的側面については内省データ、語用論的側面についてはコーパスデータの比重が高くなる。

### 4. 研究成果

(1)現代日本語名詞節の一つであるトキ節の述部ル/タ形について、絶対テンス説・相対テンス説・併存説を検討した結果、上記三者の中では併存説が相対的に記述的妥当性を持つこと、また、併存説においても一部不十分さが残り、さらに第3の基準時の存在が示唆されることを明らかにした。また、経験構文の一部を担うコト節と、その誤用・方言形であるとされるトキ節の分布についてコーパスにおける分布を検討し、コト節による経験構文は2種あり、トキ節による経験構文はその片方にのみ対応するもので、誤用等とは言えないタイプのものがあることを明らかにした。さらに上記経験構文の2種の類型を存在構文の下位類として位置づけることにより、テンス・アスペクトを存在構文であらわすことの意味づけについて示唆を得た。

(2)古典日本語の名詞節について、realis / irrealis の区別を担う形式の対立が、複文構文全体の意味によって異なること、具体的には絶対存在文・所有文においてはrealis / irrealis の形態的区別が義務的ではないのに対し、それ以外の存在文(場所存在文等)においてはほぼ義務的である、ということ、上代・中古資料の調査・分析により明らかにした。また、上代、中古の連体修飾節内の形容詞において時解釈に関し現代語とは異なる振る舞いを見せる、具体的にはある種の動態性(変化の内在)を認めざるを得ない特殊なケースがあることを見いだした。隣接する国語教育領域との学際的論点として、名詞修飾を受ける名詞の語彙的性質について主として抽象名詞の意味・統語的性質を調査・記述した。

(3)日本語における名詞修飾節とそれ以外の従属節との相関・棲み分け、またその状況と、中国語における同様の状況との対応關係をそれぞれ分析し、現代日本語においては外の関係の名詞修飾節と非制限的名詞修飾節が一定の割合でそれ以外の従属節と互換可能である(狭義文法的には任意選択關係にある)こと、現代中国語ではフラットかつ多数の従属節連鎖が可能であるのに対し現代日本語ではそれがかなりの程度忌避されること、非制限的名詞修飾節がそれを回避する要素の一つとして機能すること、等を明らかにした。また、現代日本語においては古典日本語のような意味的透明性が高く、解釈があいまいで広範な分布を持つ形態が存在しないが、古典日本語連用形節、英語における分詞構文は現代日本語の、名詞節を含めた各種構文よりかなり広範な分布を持ち汎用性が高いことを示した。

(4)日本語名詞節の諸特徴のうち、内部分類との相関も念頭に置きながら、主節との共通・相違点に関する整理をおこなった。また、連体修飾構造をとる喚体文について、「美しい花!」のよ

うな従来型に加え、「重い荷物ですね」のようなタイプが存すること、この構文が多重主語構文からの形容詞移動では生み出されないことを解明した。さらに派生する現象として、現代日本語の形容詞の分布がある種の不完全性を抱えており、人を主語とする形容詞のうち感情・感覚形容詞は一項の構文を成立させるのに対し、人の属性を表す形容詞はほぼ義務的に部分主語をとって二項の格体制をとるといふ、英語・中国語にはなく、また、現代日本語でも動詞テイル形述語等には見られない性質を持っていることを明らかにした。

(5) 名詞修飾節を中心とした従属節のテンスに関し、不規則な基準時のゆれがおきる場合についての説明としての不定形説が、少なくとも4つの構文環境で成り立たず、不規則な基準時のゆれを予測するには別の条件設定が必要であることを明らかにした。また、一部の認知意味論的研究による、従属節が事態認識時を基準とするという認識時説が、特定の構文においては直感的な親和性を持つものの、なぜそのような構文にだけ認識時基準が成り立つのか、また認識時説は多くの場合、ル形のアスペクチュアリティの変容を前提とするが、なぜ認識時基準とアスペクチュアリティの変容とが相関を持つのか、等の点についての説明が未完であることを指摘した。

(6) 主として(2)(4)の成果の応用に関して、国語辞典の電子化とその普及に際して、従来の、語を中心とした用法記述を超えて、適正化されたコーパスを元に、名詞修飾節をはじめとする複文の生成についての学習が可能になることを明らかにし、その上で、適切な用例の収集方法と、用例提示のモデルを示唆した。また、複文習得に関する基礎調査として、小中学生を対象に、複文の誤りを発見し校正をおこなう課題学習調査をおこなった。

(7) 現代日本語名詞修飾節の時間的要素(テンポラリティー・アスペクチュアリティー他)について体系的整理を行い、以下のような知見を明らかにした。

・テンスの形式的定義が、典型的用法においても従来不十分で、「過去とは出来事時が発話時より以前であることである」というような記述において、発話時の方には基準時という名称(カテゴリ)が与えられていたのに対し、出来事時に当たる部(カテゴリ)分に名称がなく、そのためそのカテゴリに対する検討が不十分であった。本研究では上記の、名称のないカテゴリに「ターゲット時」という名称を与え、そのことによりテンス現象とその変容を体系的に捉えることを可能にした。具体的には相対テンス現象は典型的にはターゲット時の変容を伴わない基準時の変容であり、いわゆるムードのタ等は基準時の変容を伴わないターゲット時の変容であると捉え直すことが可能になった。

・従属節テンスの基準時のゆれ幅に関し、原理的に特定なしとする立場に対する検討を行い、その立場に立った場合は基準時の指定が特定なしというだけでなく理論的に基準時がない、すなわちテンスという概念規定にとって基準時という概念が不要になってしまうという問題点を示し、さらに、主節時という文法上の指定が可能な時間軸上の特異点を基準にすることにより不自然な文が自然になるという現象が存在することを具体的な例とともに示した。

(8) 母語話者の作文コーパスを用いて名詞修飾節の発達・習熟について調査・分析をおこなった。全国学力学習状況調査過去データへの調査によって、3つ以上の出来事を複文を含ディスコースにまとめる課題の正解率に問題のあること、児童生徒作文においては、「につれて」節等の適切な使用についての遅れがあることが明らかになった。また、高校生・大学生作文において、より習熟度の高い文章に比べ、「ことを意味する」「条件節のタラ」「場合」と「ケース」の併用等に問題点のあることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 安部朋世 橋本修 関口雄基	4. 巻 11
2. 論文標題 日本語リーダビリティ研究の、国語教育への応用可能性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日中言語研究と日本語教育	6. 最初と最後の頁 106-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本修・安部朋世・関口雄基	4. 巻 133
2. 論文標題 学習用国語辞典の語釈の難易度をめぐって	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国語科教育研究	6. 最初と最後の頁 89-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大島資生	4. 巻 55
2. 論文標題 「いかに - か」構文について 状態化をもたらす条件	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 都大論究	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 橋本修・安部朋世
2. 発表標題 連文か複文か
3. 学会等名 韓国日本語文化学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安部朋世・橋本修
2. 発表標題 次世代型辞書の用例拡充に向けて
3. 学会等名 韓国日本語文化学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安部朋世・橋本修・西垣知佳子・田中佑・永田里美
2. 発表標題 児童・生徒の作文における誤りの発生と修正
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 橋本修
2. 発表標題 「認識時」拡張解釈の可能性をめぐって
3. 学会等名 韓国日本語文化学会2018春季国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 橋本修
2. 発表標題 「ときがある」とその周辺
3. 学会等名 日中韓三国日本語文化に関する国際学術シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 橋本修・安部朋世・関口雄基
2. 発表標題 学習用国語辞書語彙中語彙のリーダビリティについて
3. 学会等名 第22回文法教育研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 橋本修・劉剣	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日中言語文化出版社	5. 総ページ数 139p
3. 書名 中文日訳の基礎的研究(一)	

1. 著者名 大島資生ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 624p
3. 書名 歴史言語学の射程	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	安部 朋世  (Abe Tomoyo)  (00341967)	千葉大学・教育学部・教授    (12501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	大島 資生  (Oshima Motoo)  (30213705)	東京都立大学・人文科学研究科・教授    (22604)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関